

発掘調査速報展

2016

沖縄県立
埋蔵文化財センター
企画展



白保竿根田原洞穴遺跡

平成28年 8月2日(火)

▼
9月4日(日)



阿波連浦貝塚



首里城公園 中城御殿跡



基地内文化財
(西普天間住宅地区)

沖縄県立埋蔵文化財センター

目次

ごあいさつ	1
平成 27 年度調査実施個所	2
白保竿根田原洞穴遺跡	4
阿波連浦貝塚（県内遺跡）	8
西普天間住宅地区（基地内文化財）	12
首里城公園中城御殿跡	15

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報展 2016」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製及び転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には、貝塚、グスク、集落跡、近世墓などを含め約 4,500 カ所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人たちが残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄県の歴史・文化の解明や研究に役立てています。

通常、発掘調査が始まってから、土器や石器などの出土遺物を整理し、報告書を刊行するまでには数年の歳月を必要とします。そこで当センターでは発掘調査で得られた最新の成果をいち早く、県民をはじめとする多くの方々に見ていただきたいとの思いから、前年度に実施した発掘調査の成果を展示公開する「発掘調査速報展」を毎年開催しています。

今回の「発掘調査速報展 2016」では、2015（平成 27）年度に調査を行った沖縄本島・離島を含む 4 地区の発掘調査の主な成果を、出土遺物や写真パネルなどを通して紹介しております。

新石垣空港内に位置する白保竿根田原^{しらほさおねたばる}洞穴遺跡の調査では、約 2 万年前の人骨が出土し、私たちの祖先がどこから来たのかを知ることのできる貴重な遺跡として注目を集めています。また、琉球国王の世子の邸宅であった中城^{なかがすく}御殿跡^{うどうん}（旧県立博物館跡）からは、往時の暮らしぶりがうかがえる出土遺物が数多く見つかっています。

当センターが行った発掘調査を通して、多くの方々が遺跡や遺物などに接し、先人たちの暮らしに想いを馳せるとともに、沖縄の歴史と文化に対して親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める一助となれば幸いです。

平成 28 年 8 月 2 日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 金 城 亀 信

平成 27 年度 発掘調査実施箇所

沖縄本島



道跡（普天間旧道跡）

③西普天間住宅地区（旧キャンプ瑞慶覧）
【宜野湾市】



貝集中遺構

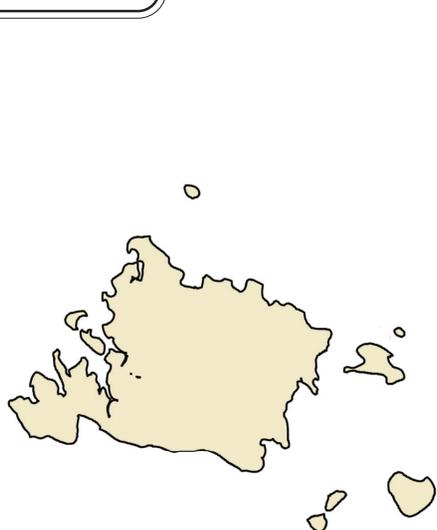
②阿波連浦貝塚
【渡嘉敷村】



上之御殿西側石積み遺構

④首里城公園中城御殿跡
【那覇市】

八重山諸島



遺跡近景

①白保竿根田原洞穴遺跡
【石垣市】

発掘調査一覧（平成27年度）

事業名（遺跡名）	所在地	時代区分
① 白保竿根田原洞穴遺跡確認調査 （白保竿根田原洞穴遺跡）	石垣市	旧石器時代（後期更新世）～グスク時代
② 県内遺跡詳細分布調査 （阿波連浦貝塚）	渡嘉敷村	縄文時代～弥生時代並行期
③ 基地内文化財分布調査 （西普天間住宅地区）	宜野湾市	縄文時代～近代
④ 首里城公園発掘調査 （中城御殿跡）	那覇市	近世～現代

しらほさおね たばらどうけつ いせき 白保竿根田原洞穴遺跡

事業名：白保竿根田原洞穴遺跡確認調査
所在地：石垣市字白保（新石垣空港敷地内）
時代：旧石器時代（後期更新世）～グスク時代
調査期間：平成 27（2015）年 6 月 1 日～ 6 月 30 日
調査面積：約 4 m²

1 はじめに

琉球列島の島々は、琉球石灰岩で覆われた地域が多く、人骨が化石として残りやすいことから、旧石器時代の人骨が数多く出土することで知られています。これまで、沖縄本島や伊江島、久米島、宮古島などにおいて、10 か所前後の遺跡が発見されていますが、八重山諸島では未確認の状態が続いていました。

このような中で、平成 22（2010）年度に行われた新石垣空港建設に伴う発掘調査で出土した人骨が、約 2 万年前のものであることがわかり、その当時の石垣島に人類が到達していたことを明らかにしました。

その後、沖縄県立埋蔵文化財センターでは、遺跡のより詳細な性格・範囲を確認する目的で、平成 24（2012）年度から確認調査を行っています。平成 27（2015）年度は 6 月の 1 か月間発掘調査を実施しました。調査にあたっては、出土遺物の分析に支障がないよう、また、出土状況の再検証が可能ないように、検出や記録、取上げ、運搬、分析試料サンプリングに至るまで慎重かつ迅速に行うよう努めました。

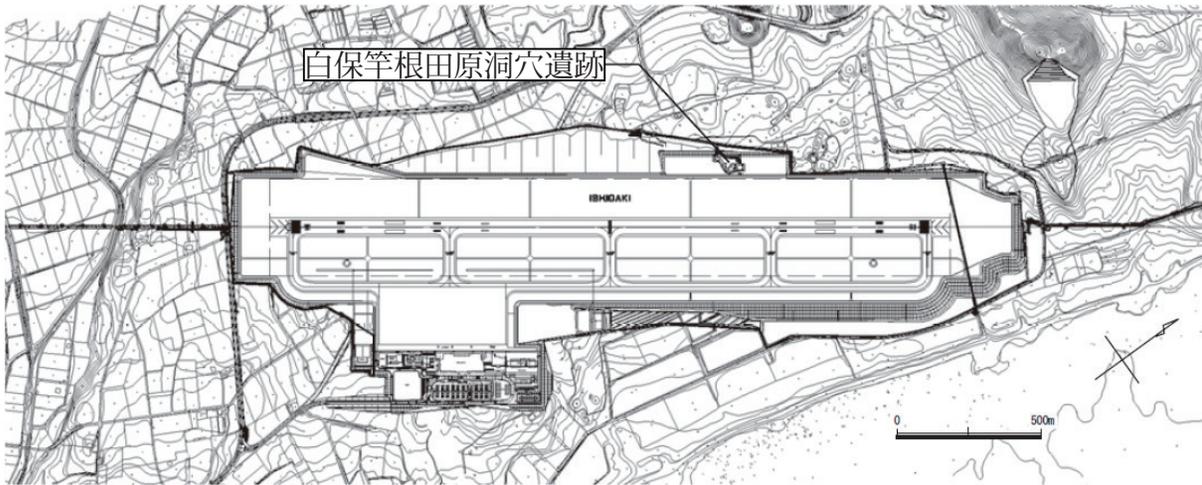
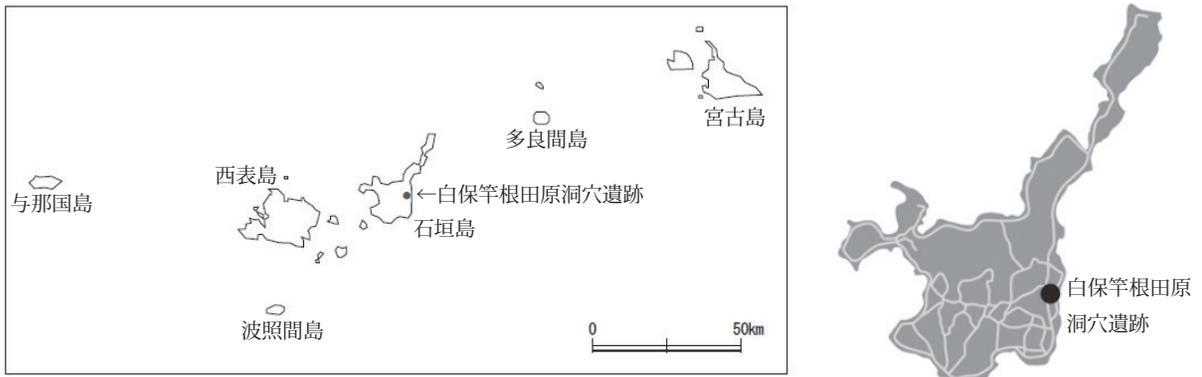
2 調査の概要

平成 27（2015）年度の調査は、遺跡の基盤層の確認を目的として、G・H-4・5 グリッドにおいて 4m²の調査を行いました。特に H4 グリッドに位置する崩落岩の岩陰部分のⅢ E 層（2 万～2 万 4 千年前 BP）からは、人骨片がまとまって出土する状況が確認されました。人骨に部位的なまとまりがあり、人体の各部の位置関係を保った状態で埋蔵されている可能性があることから、今後、出土状況について分析を行う予定にしています。

また発掘と並行し、遺跡周辺の地域に石器石材として利用可能な石材が分布するのかを確認するための調査を行い、りよくしよくへんがん 緑色片岩やこどうきせきあんざんがん 古銅輝石安山岩などを確認しました。さらに、洞穴堆積物分析や鍾乳石のサンプリングを行い、洞穴や遺跡の形成・堆積の過程について分析を行っています。

3 今後の計画

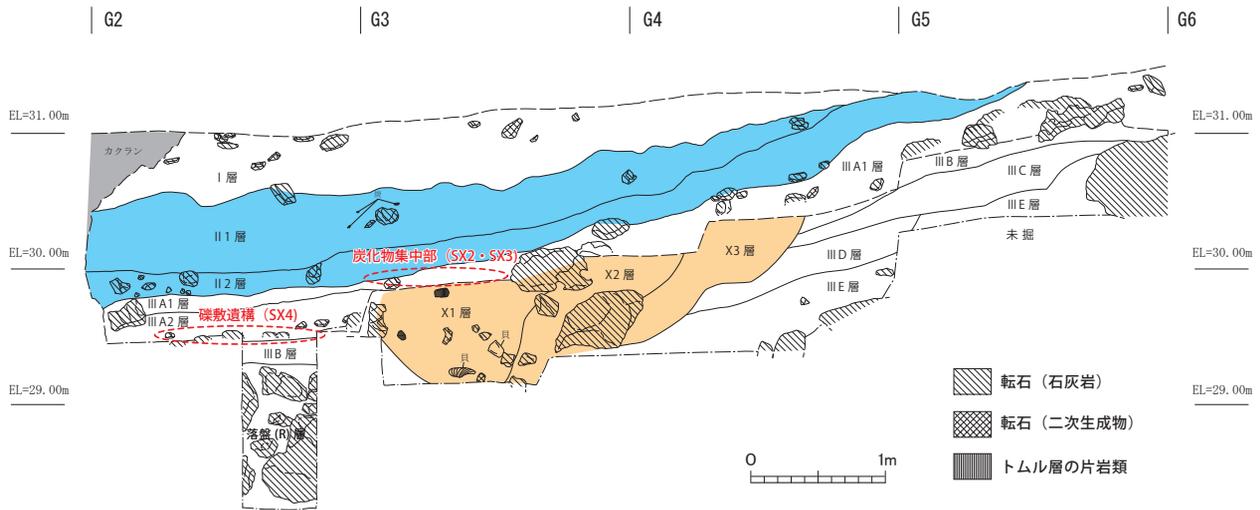
平成 28（2016）年度まで確認調査を行うとともに、遺跡の適切な保存や評価、地域での活用法について、考古学や人類学、地質学の研究者で構成した調査指導委員会により検討を行い、これまでの成果をまとめた調査報告書を刊行する予定です。



第1図 白保竿根田原洞穴遺跡の位置



第2図 平成27年度調査範囲 (G・H・4・5)



第3図 遺跡の基本層序

第1表 層序と主な遺構・遺物一覧

層序	時代 (年代BP)	遺構	遺物 (出土量: ◎=多い・○=普通・△=少ない)															
			人工遺物				自然遺物								カニ・ヤシガニ	貝類		
			陶磁器	土器	貝・骨製品	石器・石材	動物骨	魚類	カエル類	リクガメ類	トカゲ・ヘビ	鳥類	コウモリ	ネズミ類			ネコ	イノシシ
0層	現代	-																
I層	中森期 (グスク時代・14~16世紀)	地床炉跡:1基	△	△			△		○	○	△	△	△	△	△	△		○
II層	無土器期~中森期	津波堆積層か			△				○	○	△	△	△	△	△		△	○
III A1層	無土器期 (約2000年前・弥生並行)	炭化物集中:2基			△	○	△	◎	◎	○	◎	△	○	△	△	◎		◎
III A2層	下田原期 (約4000年前・縄文後期並行)	礫敷遺構		△														
S層	下田原期 (約4000年前・縄文後期並行)	崖墓の可能性		△	△	△	◎	○	○	○	○	△	△	△		○	△	◎
III B層	完新世前半 (8500BP~9500BP)	-				○	△	○	◎	△	◎	△	○	○	△	◎		◎
B層	後期更新世末 (12000BP)	-					△	△	○	△	○	○	△	△		○		
III C層	後期更新世 (16000BP~18000BP)	-				△	◎	△	○	△	◎	△	△	○	△	○		△
III D層	後期更新世	-																
III E~ IV層	後期更新世 (20000BP~24000BP)	-					◎	△	◎		◎	○	△	◎		△		
A層	更新世か	-						△	△		△	△	△	△	△		○	○



写真1 遺跡近景

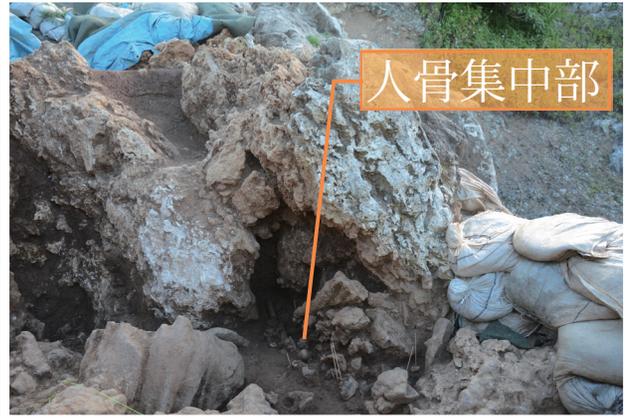


写真2 人骨を覆う崩落岩 (H4区)



写真3 H4区ⅢE層人骨検出作業状況



写真4 人骨の取り上げ作業状況



写真5 人骨出土状況 (画像右が頭骨・顔面部分 左が下顎骨)

あはれんうらかいづか 阿波連浦貝塚 (県内遺跡)

事業名：県内遺跡詳細分布調査

所在地：渡嘉敷村阿波連浦

時代：縄文時代～弥生時代並行期

調査期間：平成 27(2015) 年 6 月 30 日～ 9 月 10 日

調査面積：約 20m²

1. 調査の目的

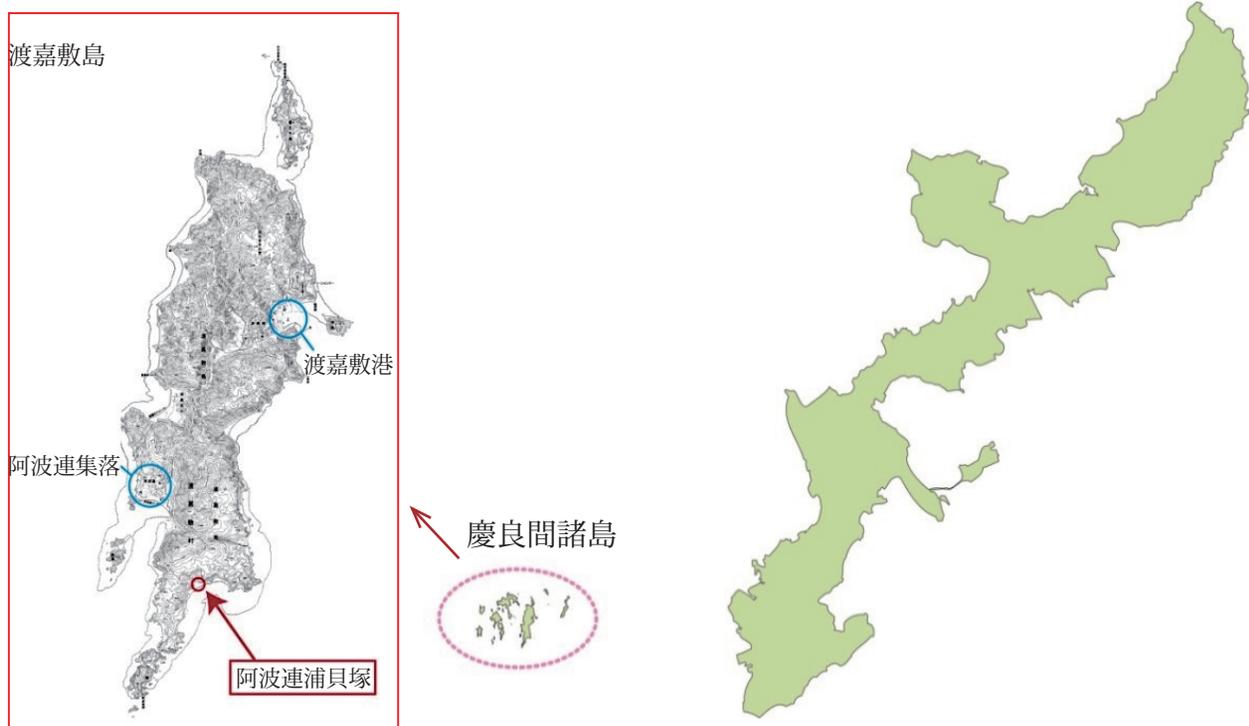
これまで埋蔵文化財の分布状況の把握が不十分であった慶良間諸島（渡嘉敷村・座間味村）において、平成 22～27 年度の予定で遺跡分布調査を実施しました。また、平成 27 年度までの調査成果をまとめた報告書「慶良間諸島の遺跡」を刊行しました。

2. 阿波連浦貝塚の範囲確認調査

平成 27 年度は渡嘉敷村阿波連浦貝塚の範囲確認調査を実施しました。

阿波連浦貝塚は、渡嘉敷島南東隅の海岸砂丘に位置する縄文時代晩期～弥生時代並行期の遺跡で、昭和 53（1978）年に沖縄国際大学の学生による踏査によって、採砂中の砂丘より多くの貝殻や土器を発見しました。その後同大学試掘調査（1978、1979）及び範囲確認調査（1986、1987）が行われ、その結果 3 つの文化層（Ⅳ層、Ⅵ層、Ⅷ層）が確認されました。またⅥ層から出土し標識とされた阿波連浦下層式土器は縄文時代晩期から弥生時代並行期の時期に位置付けられ、南九州縄文時代晩期の黒川式くろかわしきと特徴が類似することが指摘されていることから、土器型式の変遷や九州地域との関連（交流）を知る重要な遺跡と考えられています。しかし近年風雨や雨水の流れ込みにより遺跡の崩壊が進み、その保存が懸念けねんされていました。

そこで当センターでは、遺跡の保護を検討するために平成 26 年度に地形測量と範囲確認調査を、平成 27 年度も引き続き範囲確認調査を実施しました。

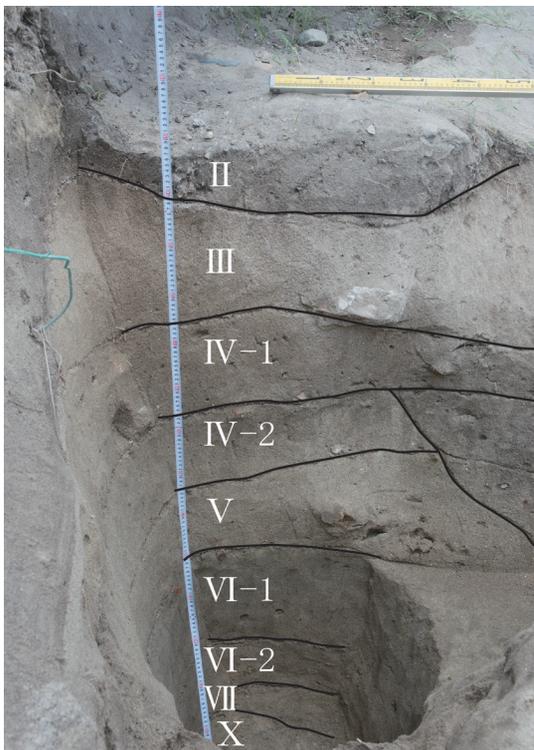


3. 今年度の調査について

今回は昨年度確認した包含層^{ほうがんそう}の範囲を把握し阿波連浦貝塚の詳細な範囲を確認するために3か所に調査区を設定し調査を行いました。



平成 27 年度 阿波連浦貝塚 調査箇所 平面図

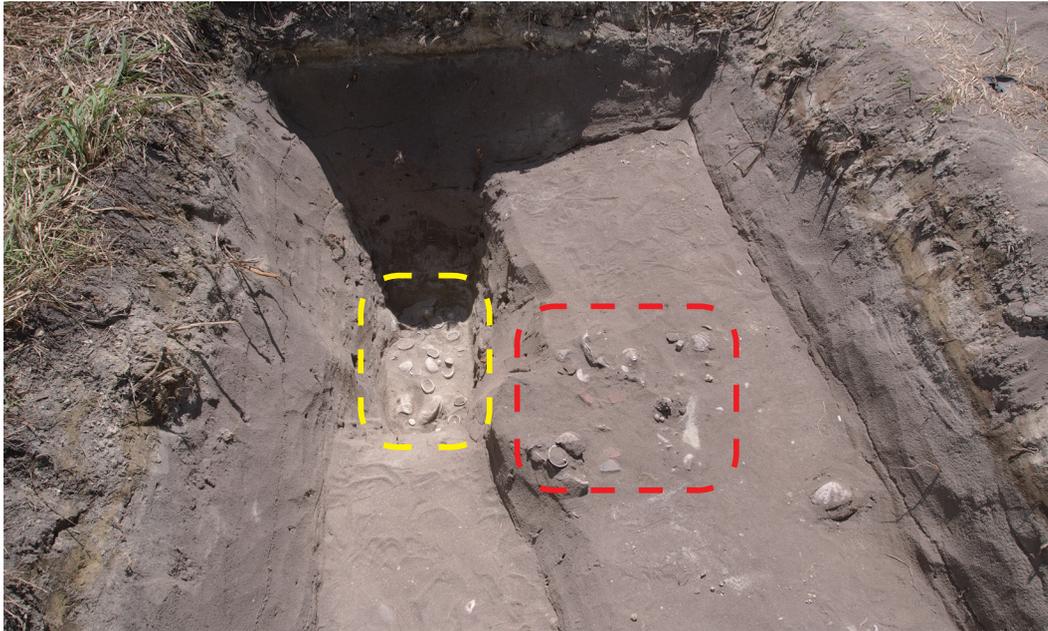


阿波連浦貝塚 基本層序 (左：平成 26 年度 トリツ B 右：平成 27 年度 調査区①)

調査の結果、調査区②では北に向けて基盤層であるX層が北へ傾斜する状況が、また調査区③では地表から1.5 mまで客土であるI層が堆積している状況が確認できました。さらに調査区①ではIV層からVII層を再確認することができ、新たな包含層であるIX層を確認することができました。

このうち調査区①で確認したVII層は調査区②やトレンチBに比べ厚く堆積しており、これに伴いVI層とその上層も高い位置で堆積していました。

遺構はIV層上面から貝集中遺構と土坑と思われる遺構が、VI層の上面からは貝集中遺構を確認しました。



調査区① 貝集中遺構検出状況 (赤：IV層検出 黄色：VI層検出)



調査区① 土坑検出状況 (赤部分)

遺物はIV層から無文尖底系土器^{むもんせんてい}や浜屋原式土器^{はまやばる}、阿波連浦IV層土器群、阿波連浦下層式土器の特徴を持つものが、VI層から標識である阿波連浦下層式土器が出土しました。また今回VII層より下の層から出土した無文土器は、ハケ状の器面調整がなされ、直線的な器形をしていることより縄文時代後期(点刻線文系様式)^{てんこくせんもん}と考えました。この土器の出土層は過去に壺型土器が確認されたVIII層よりも古いと考えられるためIX層としました。



調査区① IX層 土器出土状況



IX層 出土土器

4. 阿波連浦貝塚の範囲について

これまでの調査の結果、阿波連浦貝塚は、北及び東に露出する岩盤付近から砂丘が平面的に広がる南西の川跡付近まで広がり、南側は調査区③の北側までが範囲となると考えられます。



5. 今後の保存について

阿波連浦貝塚は風雨や雨水の流れ込みによる遺跡の崩壊を防ぐため、調査終了後にドレーンシートによって法面を覆い、遺跡を保護しています。

にしふてんまじゅうたくちく きちないぶんかざい 西普天間住宅地区 (基地内文化財)

事業名：基地内文化財分布調査

所在地：宜野湾市西普天間住宅地区（旧キャンプ瑞慶覧）

時代：縄文時代～近代

調査期間：平成 27（2015）年 8 月 3 日～ 10 月 1 日（試掘調査）

同年 11 月 30 日～平成 28（2016）年 1 月 29 日（確認調査）

調査面積：（試掘調査）計 1600㎡（4×4m 試掘 94 か所、トレンチ 1 か所）

（確認調査）計 806.5㎡（トレンチ 4 か所）

1 はじめに

昨年の平成 27(2015)年 3 月 31 日に、キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区が返還されました。この場所の跡地利用に伴い、文化財の適切な保護・活用のため、開発等の前に埋蔵文化財の有無を把握する目的で、平成 26 年度より宜野湾市教育委員会により同地区の試掘調査を開始しました。同地区は 51ha と広域なことから、宜野湾市の依頼を受け、平成 27 年度より沖縄県教育委員会も協力して試掘調査を行うことになりました。

沖縄県立埋蔵文化財センターが昨年度実施した試掘・確認調査によって、新たに 3 つの遺跡が発見されました。



図 1 西普天間住宅地区の位置



図2 昭和20年1月の西普天間住宅地区周辺の航空写真

2 調査の方法

試掘坑の設定 平成27年度は主に東側を対象に調査を行いました。試掘は西普天間住宅地区を東西南北で30×30mのマス目で区切り、そのマス目の北東角に4×4mの試掘坑を設けて発掘を行いました。ただし、建物や樹木があるところを避け、また過去の地図や写真によって遺構がある可能性のある場所については、その場所に動かして設定しました。

試掘の方法 試掘は、迅速に進めるために重機を用いて掘り進め、遺構が確認された場合はそこで止め、人力で検出しました。検出された遺構と掘削によってできた壁面の記録を行い、それが終了した試掘坑は順次埋め戻していきました。

確認調査の設定 後述のように、試掘調査によって発見された遺構のうち、特に4つの試掘坑についてその規模や広がり of 把握が必要だったため、試掘坑を拡張して確認調査を行いました。

3 調査成果

普天間石川原第二遺跡 ふてんまいしかわばる 平成26年度の宜野湾市教育委員会の調査成果も合わせた結果、先史時代、グスク時代、近世・近代の3つの時代にまたがる遺跡であることが分かりました。また試掘で遺構や遺構のあった地層が確認される試掘坑も多いので、現時点では広い範囲が遺跡として想定されています。

主な遺構として、先史時代とグスク時代の土坑や柱穴、近世近代の土坑や溝、かまどなどが検出されています。

あにやあがりぼるこぼ
安仁屋 東原古墓群

試掘とその後の確認調査によって、2基の墓が発見されました。東側の墓1は、屋根部は戦後の改変で失われていましたが、墓内と墓庭は良好な状態で残されていました。西側の墓2は、墓1と同様に屋根部が崩れ、墓庭部分も失われていましたが、墓室は良好な状態で残されていました。近世・近代の墓は、丘陵沿いに墓を作ることが多いため、今回調査した場所の周辺でさらに古墓が検出される可能性が高いと思われます。

普天間旧道跡 1945年米軍撮影の航空写真で確認することができたため、この道があったと考えられる場所の4か所を試掘したところ、いずれの場所でも普天間旧道の遺構を確認することができました。さらに道跡の広がり調べるために確認調査を行ったところ、側溝部分を含めて道幅が約4.7mと確認されました。この道跡の遺構は、西普天間住宅地区の東側にある海軍病院建設予定地内における発掘調査や平成26年度の西普天間住宅地区フェンス付近の道路工事に伴う試掘確認調査においても確認されているため（宜野湾市教育委員会より情報提供）、かつて旧道が通っていた箇所には、道跡が残されている可能性が高いと考えられます。

4 今後の計画

西普天間住宅地区の埋蔵文化財調査は、2016（平成28）年度も引き続き試掘調査を行うとともに、試掘によって発見された遺跡の本調査を行っていきます。沖縄県は西側の緑地部分の試掘・確認調査を行っています。

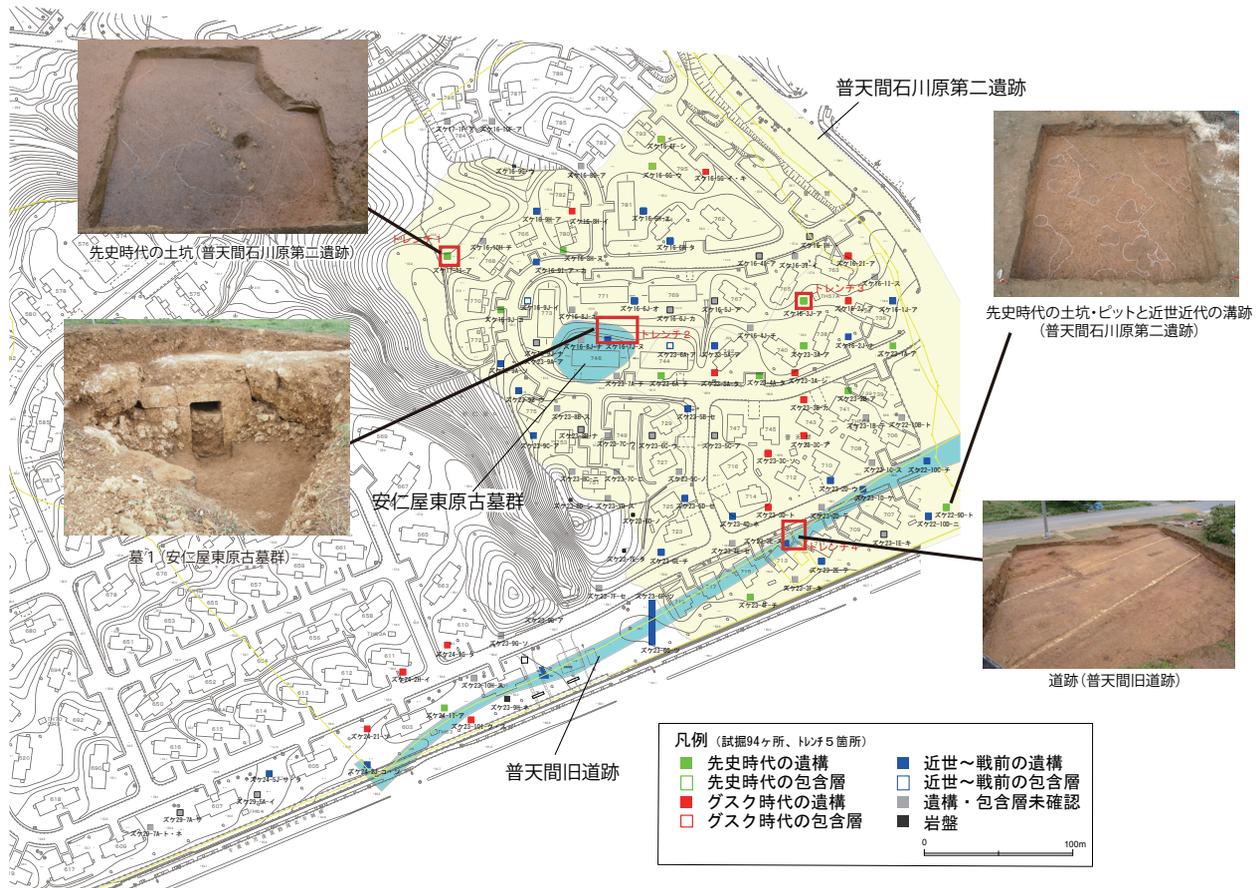


図3 平成27年度試掘成果と発見された遺跡・主な遺構

しゅりじょうこうえん なかぐすくう どうんあと 首里城公園 中城御殿跡

事業名：首里城公園発掘調査

所在地：那覇市首里大中町 1- 1

時代：近世～現代

調査期間：平成 27（2015）年 6 月 1 日～ 12 月 18 日

調査面積：300m²

1. 中城御殿の概要

中城御殿は、次の琉球国王となる世子^{せいし}が暮らした邸宅跡を指します。当初その建物は、17 世紀前半に現首里高等学校敷地内（現首里真和志町^{まわし}）に創建されました。その後、明治 8（1875）年に現在の首里大中町であるこの場所に移転し、昭和 20（1945）年の沖縄戦により破壊されるまで存在してました。今回報告の対象とするのは、移転後の中城御殿を指します。

戦後は一時、引揚者たちのバラックが建てられ、のちに首里市役所、首里バス会社の敷地として使用されましたが、昭和 40（1965）年に龍潭^{りゅうたん}の東側にあった博物館を移転するために琉球政府により敷地が買い取られます。そして米国の援助により琉球政府立博物館の建物が新築されました。その後、博物館は昭和 47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称され、平成 21（2009）年に解体されるまでこの地に存在していました。

2. 調査成果

平成 27（2015）年度調査は、かつて中城御殿敷地の北西部を調査対象として発掘調査を実施しました。この場所は上之御殿^{いひぬどうん}と呼ばれる平屋の建物を中心に南側には庭園、東側には御嶽^{うたき}が配置されていました。

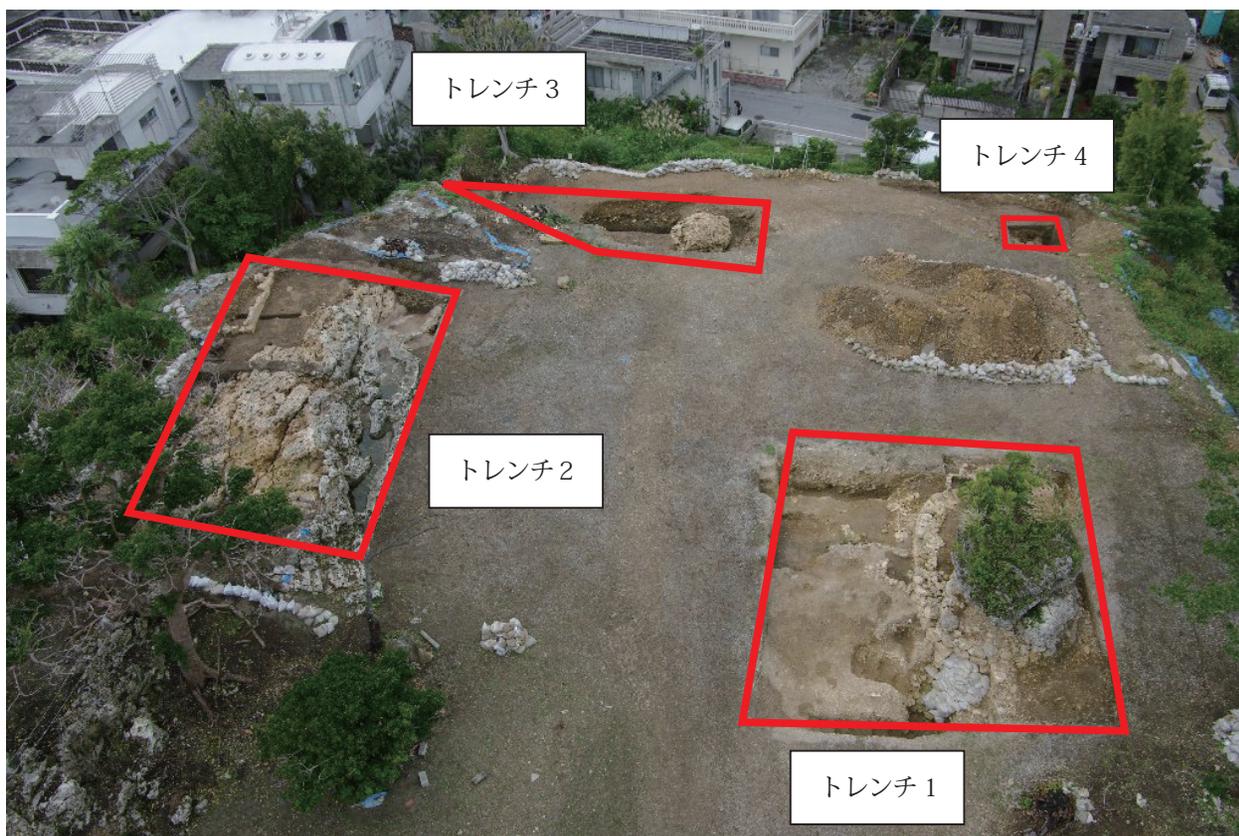
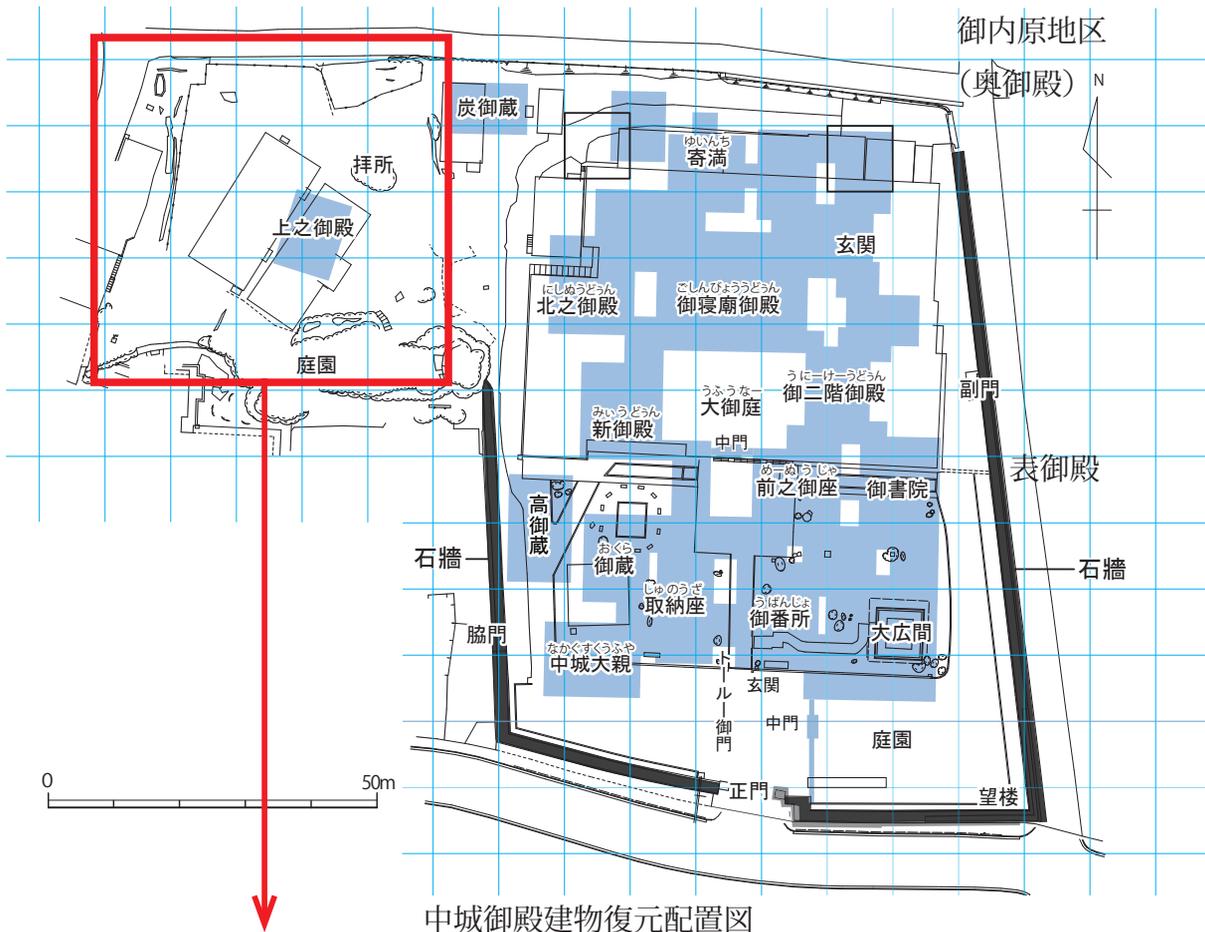
トレンチ 1 ではかつて御嶽であった岩塊^{がんかい}の周辺部において遺構確認調査を行い、御嶽に取り付いていた石階段の基礎部分が残っていることが新たに分かりました。また、庭園周辺に設定したトレンチ 2 では庭園の池が西側に広がること、そして庭園の南側に基壇状^{きだんじょう}の遺構が確認されました。

これら上之御殿と庭園、御嶽周辺を囲っていた施設を確認するために最西端にトレンチ 3 を設定しました。その結果、高さ 3 m、長さ約 15 m の石牆^{せきしょう}が検出されました。この石牆は相方積み^{あいかたづみ}で、根石^{ねいし}近くは大きめの切石で、上部は小ぶりの切石でそれぞれ積まれていることが分かりました。また、石牆の西側から井戸跡も確認されました。トレンチ 3 の石牆はおそらく近世から近代初めにかけて構築されたと、出土遺物から考えられました。

トレンチ 3 から検出された井戸跡とトレンチ 2 から検出された池状遺構と基壇状遺構は、古写真^{こしゃしん}や絵画資料には描かれていない遺構であり、出土遺物と検出された遺構の状況から大正から昭和初めにかけて構築された施設であると思われます。

将来的に中城御殿跡は復元整備が行われる予定ですが、今回の調査の結果、将来の復元整備において重要な根拠となるデータが得ることができました。

平成 27 年度調査対象区域



平成 27 年度発掘調査区全景 (東から)

○平成 27 年度発掘調査の主な成果



写真1 石囲い遺構 3



写真2 避難壕跡



写真3 トレンチ 1 全景 (南から)



写真4 石積み遺構 (石階段基底部)



写真5 石囲い遺構 1



写真6 庭園上部の岩盤上面



写真7 基壇状石列遺構

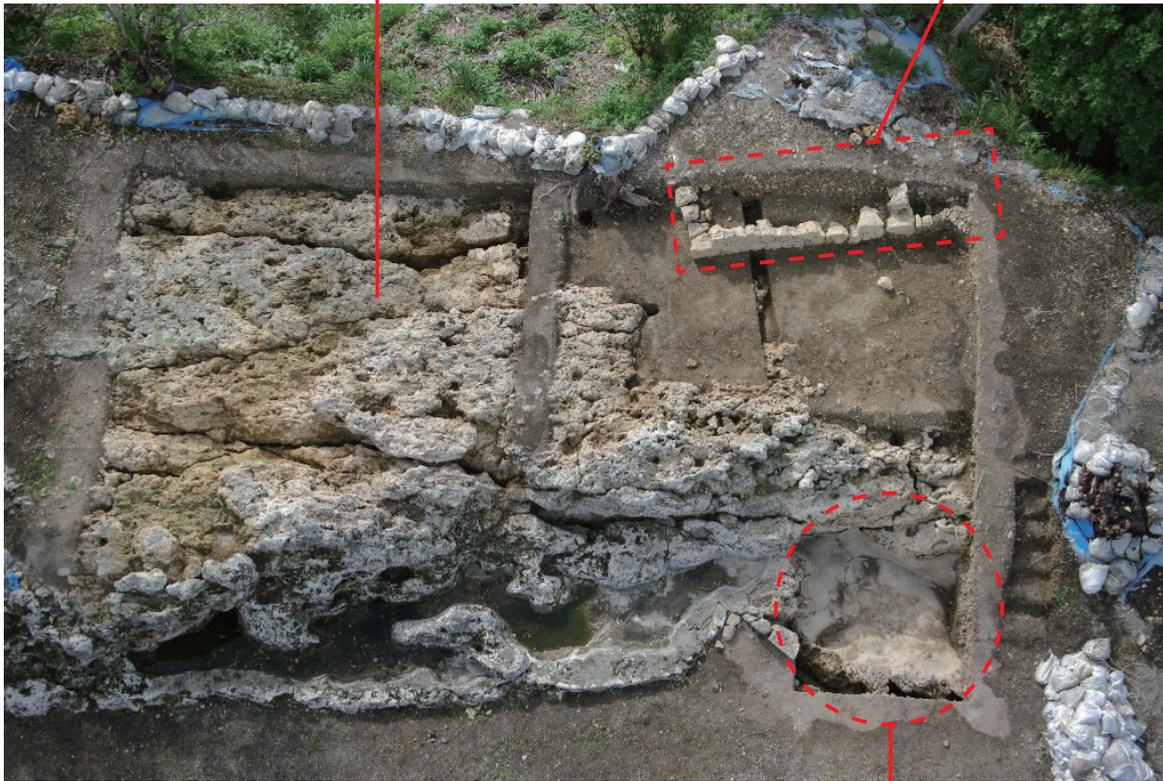


写真8 トレンチ2全景（北から）



写真9 庭園石橋の部材か



写真10 庭園下部の池



写真 11 石積み基底部近くの石列遺構



写真 12 石積み根石状況

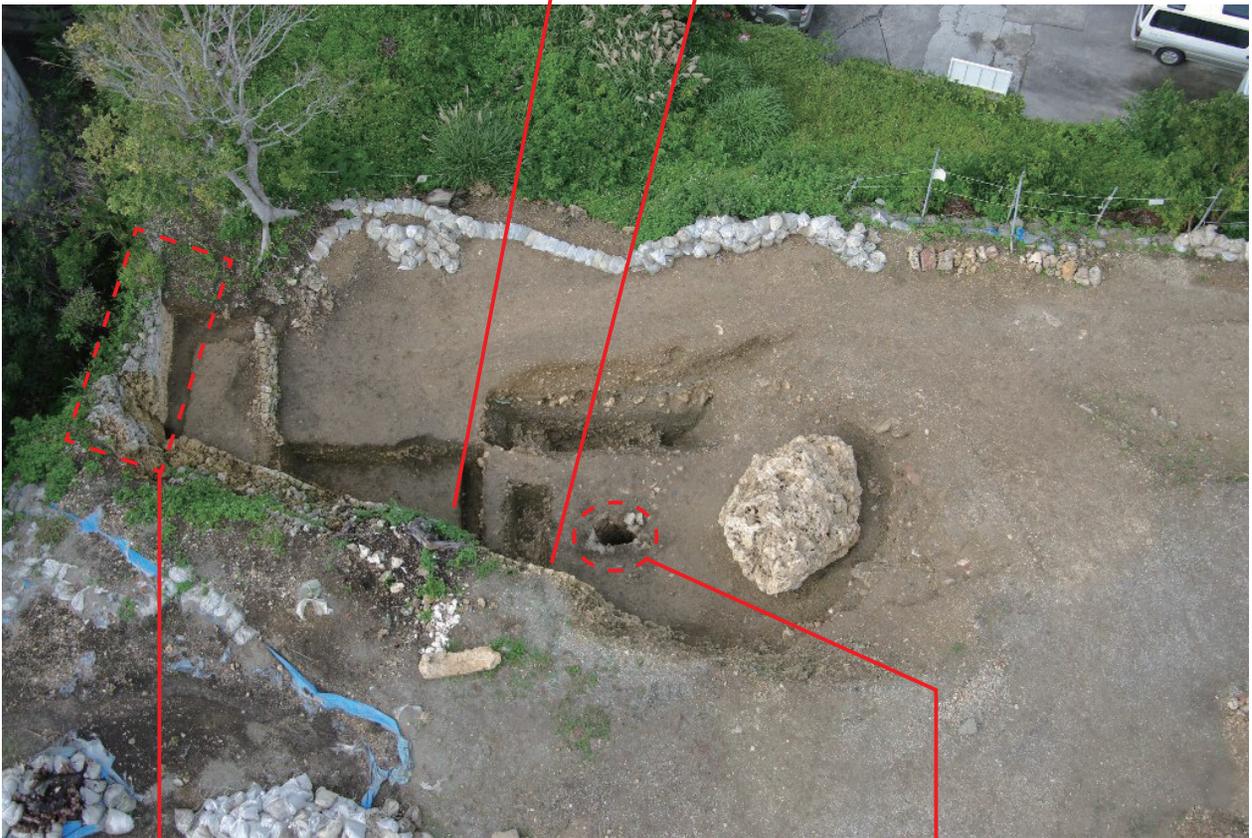


写真 13 トレンチ 3 全景(東から)



写真 14 石積み遺構



写真 15 井戸跡



写真 16 トレンチ 3 石積み遺構全景（西から）

表 中城御殿跡年表

西 暦	元 号	事 項
1621～40	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1870年	尚泰23/明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1875年	尚泰28/明治8年	世子・中城王子が新築された屋敷に移る
1879年	尚泰32/明治12年	廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1945年	昭和20年	3月下旬 宝物を3つの大金庫へ移す
		4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上
		4月8日頃 火災をのがれた御後絵(肖像画)を御嶽岩の後ろに移す
		4月10日頃 日本軍が殿を機関銃陣地にする(上之御殿、防空壕など)
		戦後 一時引き揚げ者のバラックが建つ
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する
		7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する(～66年まで)
1954年	昭和29年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地購入
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス(1951年に民営化)が当蔵へ移転
		10月 米国の援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の新館を建設 龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転 11月に開館
1972年	昭和47年	5月 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査実施
1992年	平成4年	県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査実施
1994年	平成6年	県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査実施
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が新館移転(おもろまち)のため休館
2007年	平成19年	県立埋蔵文化財センターによる調査開始

沖縄県立埋蔵文化財センター

◇ 行事予定のご案内 ◇

関連文化講座

第65回 文化講座

日時：8月6日（土）13：30開講（開場 13：00）

会場：当センター研修室

- | | |
|------------------------------------|------|
| ①白保竿根田原洞穴遺跡確認調査 | 仲座久宜 |
| ②県内遺跡詳細分布調査（阿波連浦貝塚） | 宮城淳一 |
| ③基地内文化財分布調査
（旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区） | 大堀皓平 |
| ④首里城公園中城御殿跡 | 山本正昭 |

先着 140名 予約不要・参加無料

今後の催しのご案内

企画展

◆重要文化財公開「首里城京の内出土品展」◆

開催期間：平成29年2月21日（火）～5月14日（日）

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展示室

沖縄県立埋蔵文化財センター

入所無料

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL：098-835-8751 FAX：098-835-8754

開所時間：午前9時～午後5時

（入所は午後4時30分まで）

休所日：月曜日、国民の休日

※月曜日が祝日の際は、翌日の火曜日も休所

※その他、臨時休所あり

交通：沖縄自動車道西原ICより車で10分

市外線バスターミナル発 那覇バス97番「琉大附属病院前」下車徒歩3分